第 16 回 FD フォーラム
第 2 ミニシンポジウム「学生とともに進める FD」（2011 年 3 月 6 日）
参加報告書

2011 年 3 月 7 日
英語英米文学科
眞田　敬介

FD（Faculty Development）活動というと、従来は、授業・講義を行う教員と、大学で働く職員がメインになって行われてきたように思われる。しかし、学生こそが授業・講義に参加する立場である以上、学生も FD 活動における重要な構成員と位置付けるべきであろう。このような考え方が、近年、一部の大学から起こり、その後、少しずつではあるが、全国規模で広がりを見せている。

報告者が参加した「学生とともに進める FD」は、その実践報告と議論を通し、「学生とともに進める FD とはいかなるものか」の意義と展望を考えるものである。このような考え方による FD の先駆者の一人と言える木野茂・立命館大学教授がコーディネーターとなり、立命館大学・法政大学・追手門学院大学・大阪大学・京都文教大学からの実践報告、それと全体討論が行われた。参加者が 100 名を越え、参加者の所属先も全国にわたっていたことから、このテーマがいかに大きな関心を呼んでいるものかがわかる。以下、五大学の個々の取り組みを子細に渡り報告するのは割愛するが、共通して見られた取り組み・成果・問題点、それと報告者の感想を述べる。

取り組みと成果として、第一に指摘すべきなのが、学生の主体性と教職員のサポートである。FD 活動を始めるのは教職員有志であり、彼らが学生有志を募るなり声をかけるなりする。しかしその後は、学生主体で活動が進む。例えば、京都文教大学では、1 年生の必修科目「京都文教入門」の授業内容や状況を厳しく批判した学生を交え、当該科目の改革に成功している。次に、法政大学では、2 年・3 年生が中心となり、1 年生を対象に専門演習の紹介を行い、1 年生が演習についてよく知り、少しでも充実した演習参加ができるようになっている。また、大阪大学では、全学共通教育の改革に乗り出し、学生主体で改革案を作成し、共通教育担当部署の長に改革案を提出している。

第二に、個々の大学が、それぞれの大学内での活動にとどまらず、大学間の交流を通して、FD 活動をより充実させようとしている。具体例としては、学生が主体の FD サミットを、主に立命館大学の学生がホスト役を務める形で、年数回開催している。この学生 FD サミットの動きも、少数大学ではあるが、全国的に広がりつつある。

第三に、どの大学の FD 活動においても、実に学生が主体的に、生き生きと、自信を持って活動している。今回のシンポジウムでは、教職員のほかに学生もプレゼンに登壇したが、どの学生も、プレゼンの内容はもちろん、声のボリュームやアイコンタクト、聴衆の心をつかむユーモアの挿入など、コミュニケーション能力の高さを伺わせるものであった。発表した大学の教員によると、彼らは初めからこのような優れた資質をもっていたわけではなく、FD 活動を通して大きく成長したとのことである。

むろん、問題点もある。第一に、FD 活動に積極的な教職員や学生は、大学内でまだ多いとはいえず、活動に非協力的な教職員・学生が少なからずいる（賛同はしてくれるものの、助言はおろか相談にも乗ってくれない場合も含む）。第二に、これは第一の問題点とも関連するが、FD 活動に積

極的な側とそうでない側との間で大学教育観にずれが生じている。「FD は教員の問題であり、なぜ学生が口を出すのか」と考える教員も少なくない、との報告が追手門学院大学からあった。第三に、学生 FD に関わる教職員の負担が大きいことも指摘された。

最後に、学生とともに FD 活動を進めるにあたり、報告者が特に重要だと感じた点を二点にまとめる。第一に、FD 活動に参加する教職員・学生全てにとって、活動が楽しいものでなければならない、ということである。ここで言う「楽しい」とは、「面白おかしく」ではない。学生にとって、「自分の成長を自分で確かめられる（他者からの承認を通じて）こと」が楽しいというものでなければならない、という追手門学院大学の梅村修教授の指摘が重要である。もちろん、教員にとっても職員にとっても、学生との協同を通じて、講義や職務をより楽しく行えるものであるに越したことはない。発表した大学の教職員は、皆「しんどいけど楽しい」と言っていた。

第二に、言わずもがなであるが、FD 活動の本分は授業改革だということである。本学でも悩みの種である休退学者の増加や、授業を含め大学生活に身が入らない学生の増加を少しでも解決していくための授業改革（FD 活動）である。どんな学生も教室には来なくてはならないのだから、という木野教授の指摘も忘れてはならないだろう。また、本シンポジウムの実践報告を見ると、学生 FD サミットや、教職員と学生のディスカッション（「しゃべり場」と呼ばれる）など、いわば「授業外の行事」が目立ちがちであった。そういう行事を通して、学生が大きく成長し、教職員と学生との協同が期待できるのは確かである。しかし、やはり授業の場で、少しずつでも目に見える形で改善につながっていくような FD 活動を模索すべきであろう。

※本シンポジウムを含めた FD フォーラムの報告集が、後日冊子となって報告者のもとに届くことになっているので、そちらも参照されたい。

※本学でも、来年度から学生とともに FD 活動を進める動きがある。そこで、木野教授に対して今後の指導や助言について協力を願うとともに、大学間での教職員や学生の相互交流について打診し、快諾頂いた。

※その他、大阪大学では全学共通改革を通して FD 活動を行っている。本学でも全学共通教育の改革に着手しているので、参考になると思われる。また、学生とともに FD を進める際の課題の指摘は、追手門学院大学の事例が参考になると思われる。

以上